

平成 22 年 6 月 28 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2009

課題番号：20730342

研究課題名（和文）：記憶とその映像をめぐる日韓の解釈に関する社会学的考察

研究課題名（英文）Sociological Study of analyses of Memory and its images in Korea and Japan

研究代表者

梁 仁實（YANG INSIL）

立命館大学・経営学部・講師

研究者番号：20464589

## 研究成果の概要（和文）：

この研究で得られた知見は、以下の通りである。第一、植民地の歴史をめぐる日韓の解釈が相違するなかで作られた在朝日本人に関する映像は最初から日韓の間で受け入れやすくするため、さまざまな編集が行われた。第二、それらの映像は日韓の間で通用する「普遍的価値」を強調するため、主人公を女性とし、母性や恋愛をテーマにすることで歴史の解釈の相違からくる批判を免れることができた。第三、これらの映像は 1965 年の日韓国交正常化の前からすでに制作されたが、日韓両国で上映されるには「在日」映画人たちが大きくかかわったことも明らかになった。しかし、本研究では在朝日本人の映画経験や 1960 年代に日韓で活躍していた「在日」映画人の実態を探ることができなかったが、これからの研究課題とする。

## 研究成果の概要（英文）：

This study focuses on the question of how the written and visualized memories of ex-colonizers in the post-war era are understood and received in both former colonies and former suzerain. Since 2008, I have written several articles based on archival materials and case I have collected. I will look at Japan and Korea from right after the WW2 until the early 1960s, as it was the time when many film makers crossed the border despite the absence of diplomatic relations between two countries and brought written and visualized experiences and memories of colonies. In order to see how films taken by colonizers have been watched and accepted in Japan and Korea, I took a contextual approach to visual media by considering both personal background of the subjects and social atmosphere of the time. My findings are as following. First, so many editing has been done on the films on Japanese in Korean colonies in order not to intensify ongoing controversy on perception of colonial history between two countries. Second, these films often used a woman as a central character under themes of motherhood and love in order to emphasize “universal value/common value” shared in both countries, so that they could avoid unnecessary criticism due to a difference in perception of history. And lastly, these films were shot already before the diplomatic normalization of Japan and Korea in 1965, film makers of Korean resident in Japan (*zainichi*) played an important role for these films to be shown in both countries. However, further study is necessary to understand the film experience of Japanese in Korea as well as the activities of the film makers of Korean resident in Japan in both countries in the 1960s.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：日韓、映像メディア、女性、「在日」エスニシティ、植民地、ジェンダー、在朝日本人

1. 研究開始当初の背景

近年日韓では旧植民地に住んでいた女性たちの物語やそれをめぐる映像が話題を呼んでいる。しかし、加害者/被害者の対立が明確ではない女性という立場のため、その解釈は日韓の間で大きいずれがある。同一の体験や経験でも読み手がどこでどういった形で読むのかによって、もともとにあった原本テキストの意味は大きく変わる。とりわけ、そのテキストが在朝日本人女性といったように、植民地的秩序のなかでは加害者の立場にいらながらも、ジェンダー秩序のなかでは被害者として位置づけられる敏感な位置にある人々が登場するものであると、その解釈はより複雑となる。本研究ではこうした研究背景のもと、一つの映像が国境を越えていくとき、起こりうる解釈のずれとその越境する映像にかかわる人々の役割について考えるためのものである。そのため、在朝日本人女性たちを対象とした文献と映像テキストを主な研究対象としたい。

2. 研究の目的

本志願者は今まで日韓の映像メディアにおける在日朝鮮人の表象について研究してきた。戦前の植民地時代から戦後まで日韓の映像メディアがどのように植民地朝鮮を認識してきたのか、戦後とのつながりはいかなるものであったのかについて考えてきた。しかし、これらの映像が日韓のなかでどのように紹介され、どのように受け入れられているのかについては考えてこなかった。とりわけ、

実存人物を映像にしたものが日韓で紹介されるときは大きい差異を見せる。大体実存人物の一生の映像化の場合、その人が直接書いた手記や日記、エッセイなど個人の記憶や体験に基づく映像化が行われるが、その映像が国を超えていくとき、宣伝や評論、タイトルにおいて異なる方法を見せる。もちろん、これは、在日朝鮮人に対する日韓両国の経験や記憶が異なるためでもある。本研究は主に植民地で生きた実存人物を対象とした映像が日韓の両国で公開されるとき、どのように解釈され、どのように認識されていくのかについて考えるものである。在日朝鮮人をテーマとした映像に加え、在韓日本人、在朝日本人に関する映像もその対象とする。

3. 研究の方法

本研究ではまず、在朝日本人を対象とする手記、植民地における体験を書いた日記と、当時の新聞や記事などの収集と関連映像の一次資料の収集とリストアップを行い、それを分析することにあたってはこれらのテキストが日韓の間でどのような解釈の相違あるいは類似点を示しているのかという点について、歴史学や社会史、映画史、ジェンダーの理論を持ち込んだコンテキスト分析を行った。

4. 研究成果

本研究は旧植民地に在住していた植民者たちが戦後本国に戻ったあと、自分の経験を出版物で語り、その語り映像

化された際に植民地だった国と植民者の国でどのようにそのような映像が受け入れられるのかという問題に取り組んだものである。

また、本研究では1960年代初期までも国交正常化はなかった日本と韓国の間で、多くの映画人たちが国境をまたがりながら活躍をし、そのなかで植民地の経験を語る出版物や映像はこうした人々によって運ばれた点に注目した。彼らが両国持ち込んだ映像は植民者たちの映像や植民者を描くものが多かった。本研究ではこれらの映像が日韓でどのように受け入れられたのかという問いを追究するなかで、その主体や社会的背景をもとに考察し、映像メディアのコンテクスト的考察を行った。

具体的に2年間の作業について述べると、2008年(初年度)では関連資料や文献、映像など一次資料の収集にあたった。そして、2009年にはいくつかの事例を中心に「愛は国境を越えたかー消えた植民地の過去」(釜山大学映画研究所編『映画 Cinema』2(1))と「挫折した世界化とローカリティ:1960年代韓国映画と在外韓国人」(釜山大学韓国民族文化研究所編『ローカルティの人文』2)に論文としてその成果を公開した。ここでは1960年代日韓が国交を回復するときを前後にして活躍していた「在日」たちを新しく発掘し、日韓映画交流史や文化交流史における空白を埋める作業となった。彼らは国境をまたがりながら、活躍をし、植民地を生きてきた在朝日本人たちの映像を日韓両国に運んでいた。しかし、日韓の間でまだ植民地の歴史をめぐる意見に一致がみられなかったため、「在日」の映画人たちは日韓両国で受け入れやすくするため様々な編集を加えた。また、歴史の解釈の相違に対する批判を避けるため、主に女性たちを主人公とし、そこに母性愛を持ち込んだ「普遍的価値」を強調していた。植民者としての日本人という立場とジェンダー秩序のなかでは被害者の立場になっていた日本人女性の植民地における位置は映画化するには敏感なテーマであったにもかかわらず、こうした方法によって日韓の間でこの映像は受け入れやすくなっていたのである。

ここで注目すべきもう一つの点は今まで日韓の映画史や社会学では注目してこなかった「在日」映画人たちの役割である。日本でも韓国でもまだ外国人タレントの登場や映画の輸出などが頻繁に行われる前に、彼ら

は韓国の映画界には日本から「在日」の人々を呼び、映画やドラマに出演させ、日本の放送や映画には韓国人俳優やタレントを出演させるコーディネート作業も行っていた。こうしたことは日韓の放送や映画が国内のみならず、ようやく、国境の外を意識しはじめたともいえることである。こうした変化を迎えるにあたって、「在日」映画人たちの役割は大きいものであった。こうした彼らの役割については日本でも韓国でも「在日」社会のなかでも語られることはなかった。韓国の映画史において1960年代は「自国の映画を東南アジアや日本に映画を輸出する、あるいは他国と合作を試みることもできたわけであるが、在日」映画人たちの活躍、そして在米コリアンの映画人たちの力が大きかったのである。

これらの問題を明確にするためには1960年代の日本の放送史や映画史に関する考察と、韓国映画史に関する考察、そしてそのなかで「在日」の人々が行っていた役割を考察していくことが必要であるが、本研究ではそれらの実態を詳細に探ることができなかった。これからの研究課題にしたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

梁 仁實「愛は国境を越えたかー消えた植民地の過去」釜山大学映画研究所『映画 Cinema』2号(29009, pp.141-74)

梁 仁實「挫折した世界化とローカリティ:1960年代韓国映画と在外韓国人」釜山大学韓国民族文化研究所『ローカリティの人文』2号(2009, 257-85)

梁 仁實「対談 多文化主義のいま 『芒種』からみえること」『台湾東海大学日本語文学系紀要』創刊号, pp.74-82(2009年度発行予定であったが未刊)

〔学会発表〕(計2件)

梁 仁實「在朝日本人女性を再 記憶することードラマ『海峡』を中心に」, IAPH2008(世界女性哲学者大会), 2008年7月27日、韓国梨花女子大学

梁 仁實「映画のなかの生と死ー植民地朝鮮映画を中心に」, 第2回東アジアの宗教と文化学会, 2009年8月16・17日、北海道大学

〔図書〕(計1件)

梁 仁實共著「第6章 日本のマンガにおける他者との遭遇」伊藤公雄編『マンガのなかの〈他者〉』臨川書房、2008、pp.132-163

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梁 仁實 (ヤン・インシル)

立命館大学・経営学部・講師

研究者番号：20464589